

牛ウイルス性下痢・粘膜病の 有効な対策について

近年、牛ウイルス性下痢・粘膜病(BVD-MD)の発生が増加しており、北海道では、平成23年以降、年間100頭以上発生しています。

本病は、病気の特徴から有効な対策を実施しなければ、農場・地域における清浄性を維持することが難しい疾病です。

このため、北海道農政部生産振興局畜産振興課では、オール北海道で統一した認識をもって本病の対策に取り組む必要があることから、その第一歩として、本病の有効な対策の基本方針を作成しました。

● 牛ウイルス性下痢・粘膜病とは…

- BVDウイルスの感染により、育成牛には呼吸器病や下痢などを起こすほか、特に妊娠牛には異常産(流産や胎子奇形)や繁殖障害などを起こす届出伝染病です。
- 多くは一過性で回復しますが、妊娠牛が感染すると、本病に特有の**持続感染牛(PI牛)**が産まれる場合があります、PI牛は**大きな経済的損失**を招きます。

● 持続感染牛(PI牛)とは…

- BVDウイルスが妊娠牛(**胎齢約30～150日**)に感染すると、その胎子は生後、PI牛として生まれる場合があります。
- PI牛は、一見健康に見えてもやがて発育不良となります。また、鼻汁や糞尿等に**常に多量のウイルスを排出**し続けるため、本病の**感染源**になります。
- 牛群内にPI牛がいると、農場及び地域全体に感染が広がり、生産性が著しく低下します。
- PI牛からは必ず**PI牛が産まれ、PI牛に対する治療方法**はありません。



妊娠牛が感染すると胎子にも感染

分娩後



産子は、PI牛となり、感染源に

◆ 基本方針の5つの柱 ◆

次の方針は、どれか一つが欠けても十分な効果が得られないため、
全てを複合的に地域一体となって取り組むことが有効な対策となります。



① 関係機関の連携と情報共有

有効な対策の実施には、関係機関が密に連携・情報共有し、丁寧な説明により、生産者が対策の内容を十分に理解し、納得した上で行う必要があります。



② 効果的な検査の実施

日頃から飼養牛をよく観察し、本病を疑う症状を呈する牛がいた場合、速やかに、検査を実施します。

農場はもとより、地域全体でサーベイランス等の効果的な検査を実施し、PI牛が摘発された場合、生産農場の全頭検査を実施します。

さらに、生産農場ではPI牛の最終とう汰から少なくとも6カ月間以上を基本に、牛群の妊娠状況を勘案して新生子牛を対象に検査を実施します。



③ PI牛の速やかなとう汰

PI牛が摘発された場合は、農場内や地域へのウイルスのまん延を防ぐため、PI牛の速やかなとう汰が必要です。



④ 効果的なワクチン接種

子牛には移行抗体の消失時期にあわせ、育成牛・成牛には種付け前までにワクチンを接種します。また、初回分娩以降も毎年追加接種（飼養牛全頭接種）します。



⑤ ウイルスの侵入防止対策

農場へのウイルスの侵入を防ぐために、導入牛の隔離と導入時検査を実施します。また、消毒などの日常の飼養衛生管理を徹底します。

📞 ご不明な点は、最寄りの家畜保健衛生所にご連絡を

北海道、公益社団法人北海家畜畜産物衛生指導協会